現代の日本のキリスト教会建築の内部空間構成

宇野研究室　　4107072　田村　暢生

1. 研究背景と目的

従来研究では、第二次世界大戦以前に建造されキリスト教会建築を題材とするものはあるが、戦後のキリスト教会建築の内部空間構成を扱ったものはなかった。本研究では第二次世界大戦後に建造された教会建築に着目する。

1939 年に勃発した第二次世界大戦により、東京は焼野原となり、また多くの教会建築もその犠牲になった。戦後を契機に戦時中抑圧されてきたキリスト教が息を吹返し、国外からの期待も相俟って教会建築の建造を復興の目印とすべく建築家が手掛けるようになった。

本論では国外の宗教団体の支援なくしては、建造し得なかったであろう代表的な教会建築を分析することにより、教会建築を設計する際、各建築家がキリスト教に対する解釈、またその背景をどのように建築に投影したのか、そしてそれによる空間構成を明らかにすることを目的とする。

2. 研究対象（表 1）

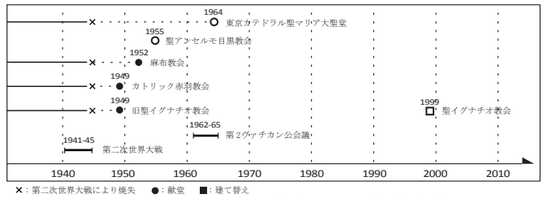
現代の東京近辺に建つ代表的な教会建築として、下記の三つを取り上げる。

目黒アンセルモ教会 /Antonin Raymond/1955
東京カテドラル聖マリア大聖堂 / 丹下健三 /1964
聖イグナチオ教会 / 坂倉建築研究所 /1999

3. 研究方法

研究対象を現地調査に基づくデータ、または参考文献から分析する。対象事例を、下記事項に従って分析する。

①自然光における採光方法に関する手法分析。
②支援教派における建築様式との比較分析。



▲図 1　年表：第二次世界大戦後の主な教会建築

▼表 1　研究対象

4. 採光による空間演出手法の分析

4-1. 手順

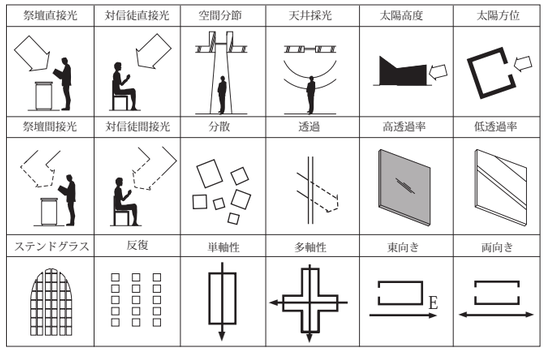
対象建築にみられる自然光の採光方法、採光手法を現地調査に基づくデータあるいは図面から分析し考察する。

4-2. 分析結果（表 2）（表 3）

①目黒アンセルモ教会は信徒に対しても祭壇に対しても間接光による表現を用い、東京カテドラル聖マリア大聖堂と聖イグナチオ教会はどちらも直接光による表現を用いる。
②目黒アンセルモ教会は天井光は用いず、東京カテドラル聖マリア大聖堂と聖イグナチオ教会は用いる。また、天井光において東京カテドラル聖マリア大聖堂では透過光、聖イグナチオ教会では反射光を用いる。
③東京カテドラル聖マリア大聖堂では太陽高度を意識した意匠決定をしており、聖イグナチオ教会では太陽方位を意識した意匠決定をしている。

小結：目黒アンセルモ教会は間接光のみを用いる。東京カテドラル聖マリア大聖堂では天井光以外で、透過率の低い開口による直接光を用いた空間設計を行っている。聖イグナチオ教会では、全ての開口において透過光または反射光を用いることで、柔らかい空間をつくりだしている。

▼表 2　採光による空間演出手法における分類表



▼表 3　自然光の採光におけるタイポロジー表

			聖アンセルモ目黒教会	東京カテドラル聖マリア大聖堂	聖イグナチオ教会
採光による演出構成手法	直接光	祭壇直接光		●	●
		対信徒直接光		●	●
		空間分節		●	
		太陽高度		●	●
		太陽方位			●
		天井採光		●	●
	間接光	対信徒間接光	●		
		祭壇間接光	●		
		分散	●		
	透過光	透過		●	●
		ステンドグラス	●		●
	透過率	高透過率	●	●	
		低透過率		●	●
	採光軸性	単軸性		●	
		多軸性			●
	採光方向	東向き	●		
		西向き		●	●

5. 支援教派の建築様式における比較分析

5-1. 手順と目的

ⅰ）聖アンセルモ目黒教会とⅱ）聖イグナチオ教会の建築的特徴を①各室の概念的配置②室配置のトポロジー[註1]的性質③理想比例値の三項目に着目してザンクト・ガレンの理想的平面図[註2]（以下理想的平面図）と比較し考察する。①では各室の用途概念を抽象化しその配置に着目し、②では各室同士の連続性にだけ着目し比較することを目的とする。

ⅲ）東京カテドラル聖マリア大聖堂
ケルン大聖堂と平面比率に着目して比較する。

5-2. 分析結果（図 2）（図 3）

ⅰ）理想的平面図と目黒アンセルモ教会の比較

①回廊南側二階の住居、聖堂西に接する住居を除いた室配置において類似していると考えられる。
②回廊を中心に展開している理想的平面図に比べ目黒アンセルモ教会では隣り合う広間と食堂・居間が連続している。それ以外ではこの観点において酷似している。
③身廊全幅、身廊全長、回廊全幅の項目に関して類似している。身廊中央部が類似していない理由として、目黒聖アンセルモ教会が単廊式であることである。聖堂全長が類似していない理由として、拝廊が無いこと、司教座を含むアプスが無いことの二点が挙げられる。

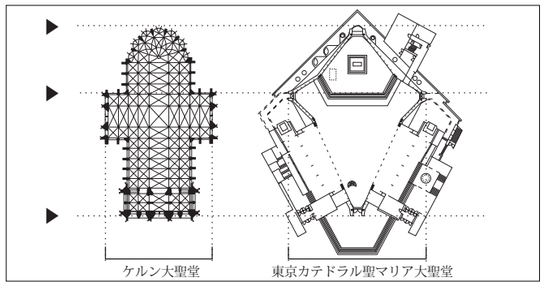
ⅱ）理想的平面図と聖イグナチオ教会の比較

①回廊が一周していないこと、住居の配置以外に類似していると考えられる。
②回廊を中心に展開している理想的平面図に比べ聖イグナチオ教会では各室の連続性がより強く見られる。
③形態に関しては類似性が見られない。

ⅲ）ケルン大聖堂と東京カテドラル聖マリア大聖堂の比較

東京カテドラル聖マリア大聖堂における身廊に対して、祭壇がある床高が上がっている部分を内陣としたとき、身廊から内陣境界線と内陣境界線から礼拝堂の比率が一致する。

小結：修道院教派である目黒聖アンセルモ教会と聖イグナチオ教会では、理想的平面図との共通点が随所に見られる。とりわけ回廊を介した聖堂、広間、食堂・居間の四項間の連続性において共通している。しかし、回廊を中心に各室が展開しているの理想的平面図に対してその性質は薄れ各室間が連続性を持っている。これは限られた敷地面積と利便性に起因するものではないかと考えられる。



▲図 2　支援教派の建築様式における比較分析

6. 結論

本論では以下の知見が得られた。

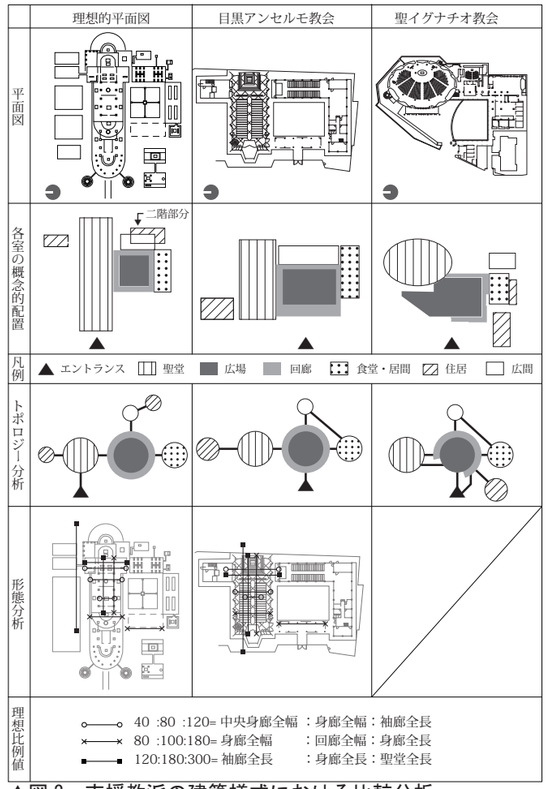
目黒聖アンセルモ教会：間接光のみによる採光を用い直接的な採光表現を避けている。またザンクト・ガレンの理想的平面図を強く意識している。以上の二つのことに加えて構造的で簡素な空間表現は、観想修道会としてのベネディクト会の厳格な空間表現を踏襲している。

東京カテドラル聖マリア大聖堂：直接光による表現を用い、支援教区であるケルン大聖堂の影響は少ない。しかし直接光による採光表現と HP シェルによる構造的表現を現代における超物質化[註3]と考えるとすると、ゴシック建築を解釈した上での空間表現であると考えられる。

聖イグナチオ教会：直接光は透過光を用い、天井採光は反射光を用いることで、柔らかな空間を生み出している。また、ザンクト・ガレンの理想的平面図を若干ではあるものの意識しているのではないかと考えられる。

第二ヴァチカン公会議[註4]（図 2）でキリスト教の現代化を伴う刷新が行われた。それに基づいた理念が聖イグナチオ教会の楕円形平面、また前述の直接光を避けた柔らかな空間演出に投影されているのではないかと考えられる。

以上のことから支援教派の建築表現を踏襲しつつ、採光や建築形態において、近代建築的手法が導入されたことがわかる。



▲図 3　支援教派の建築様式における比較分析

脚注：1）トポロジーとは、本論では距離や形態の概念を抽象化した連続と定義する。2）ベネディクト修道会の思想に基づき修道院長ハイトー（763–836）によって描かれたと想定され、その後の修道院建築に影響を与えた。3）それまで構造体としての石柱から骨組み構造となり躯体性を放棄することで、建物の精神化を実現した。 4）第二ヴァチカン公会議（1962–1965）とは教会の現代化をテーマに多くの議論がなされ、以後の教会の刷新の原動力となった。

参考文献：1）「技術と人間」丹下健三＋都市・建築設計研究所 1955–1964/ 丹下健三、川添登 / 美術出版社 1968、 2）1965 年 6 月号 133「新建築」/ 新建築社 1965、 3）JA-The-Japan-Architect 槇文彦 / 新建築社 1994, 4）建築設計資料—36 教会建築 / 建築資料研究所 1992, 5）坂倉建築研究所のディテール / 坂倉建築研究所東京事務所 / 彰国社 2000, 6）A・レーモンドの建築詳細 / 三沢浩 / 彰国社 2005, 7）私と日本建築 /アントニン・レーモンド/ 鹿島研究所出版 1967, 8）キリスト教 - その思想と歴史 - / 久米博 / 新曜社 1993, 9）教会建築 / 高橋保行、土屋吉正、長久清、加藤常有昭、奈良信、岩井要 / 日本基督教団出版局 1985、10）ドイツ建築史 / 三宅理一 / 相模書房 1981、11）西洋建築史 /Fritz Baumgart/ 鹿島出版 1983、 12）イタリア修道院の回廊空間 / 竹内裕二 / 彩流社 , 2011 13）東京カテドラル大聖堂における自然光による空間演出手法 / 鈴木信宏、伊谷峰、中澤王久東